コラム ～日本の健康・世界の健康～

「ラクの物語」とユニバーサル・ヘルス・カバレッジ

名古屋市立大学大学院看護学研究科　国際保健看護学　教授　樋口　倫代

No. 543と548で、「どうしてジェイソンは病院にいるの？」の物語とそこから考える健康の社会的決定要因のことを書きました。私が、もう１つ講義で用いているのが「ラクの物語」です。インドのある農村で実際に起った出来事をもとにした話とのことで、「いのち・開発・ＮＧＯ」（評論社、1998年）という本に－これは当時の国際的な保健戦略を批判的に考察した本の翻訳なのですが－２ページに収まる要約で紹介されています。

ラクは小さい子どもを持つ土地なし農民の女性です。前半は、彼女の生活状況が描かれています。末の「赤ん坊」が下痢を繰り返し、ラクは家でできる範囲のことをしますが、いよいよ赤ん坊がぐったりしてしまい、病院に連れて行く決心をしたところから後半になります。「これはラクにとって厳しい選択だった。」とあります。治療費だけでなく、町までの交通費や1日の日当、場合によっては休むことで仕事を失うかもしれないという経済的不安があったからです。母親の形見を売ってなんとかお金を工面し、バスに乗ってたどり着いた病院では、門番への賄賂、長い待ち時間、ラクの生活状況を理解しない医師や看護師の非難や指導などを経て、赤ん坊は点滴を受けることができました。一晩の入院で症状は少し改善し、薬の処方を受けて帰宅したのですが、帰り道で赤ん坊の下痢がまた始まり、家には食べるものも、お金も、売るものもなく、赤ん坊は間もなく亡くなった、という話です。

この物語は、ジェイソンの物語のように、健康・不健康にいかに多くの社会的要因が絡み合っているかを示すために用いられることが多いようですが、保健・健康に関連する教育や研修において、さまざまな形で使われています。私は、この物語の、特に後半部分を「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ」の理解のために使っています。

「universal health coverage」にはうまい日本語訳がなく、たいていはカタカナで表記され、ＵＨＣという略語が使われることも多いようです。世界保健機関（ＷＨＯ）が2012年に定義しています。日本の外務省は「すべての人が基礎的な保健サービスを必要なときに負担可能な費用で受けることができること」と紹介しています。最近、耳にすることが非常に多くなってきたＳＤＧs（持続可能な開発目標）の17目標の3番目、ＳＤＧ3は「すべての人に健康と福祉を」というものですが、ＵＨＣはそのＳＤＧ3の構成要素の1つです。世界中の国々が、今ＵＨＣの達成に向けた取り組みをしています。

すべての人がひとしく健康を享受できることをめざす－これは特に新しいわけではありませんが、「負担可能な費用で」と費用に関して言及しているところが、ＵＨＣの特徴と言えるでしょう。ＵＨＣの達成度を測る指標には、「必要不可欠な保健サービスによってカバーされる人口の割合」とともに、「大きな健康関連支出のあった世帯人口の割合」があります。もちろん、めざすところは、前者が大きくなることと後者が小さくなることです。「大きな支出」というと少し柔らかい印象ですが、「壊滅的な支出」という指標が使われることもあります。何を持って“壊滅的な支出”とするのかにも実は定義があるのですが、細かいことはさておき、ラクは赤ん坊を町の病院に連れて行ったことで、世帯にとって“壊滅的な支出”を経験したわけです。

この物語を素材に使うと、「日本に生まれてよかった。」という感想が必ず出ます。日本は1962年に国民皆保険を達成しました。小さい窓口負担に加えて、高額医療費制度なども利用でき、健康関連支出のために家計が壊滅的な打撃を受ける事例を今の日本ではあまり聞かなくなりました。日本はＵＨＣ達成国とみなされ、現在ＵＨＣの達成に向けた努力をしている世界の国々から注目されています。これは、とてもすばらしく、誇りに思うべきことで、日本に生まれてよかった、というのは素直な感想と言えるでしょう。しかし、そこで終わってしまうのはちょっと問題です。

費用負担の問題さえ解決すれば、誰でも必要不可欠な保健サービスを受けられるのでしょうか。これを考えるヒントに「4A」という方法を使っています。支払い可能（Affordable）　かどうかはそのうちの１つに過ぎません。そもそもラクにとって町の病院は容易に行ける（Accessible）な距離ではなく、交通も不便そうです。また、必要な人や物が利用可能な状態で存在している（Available）かどうか、つまり、いるべきスタッフがいなかったり、薬が在庫切れだったり検査薬が期限切れだったりすることが、保健医療制度が整備されていない国などではまま起こります。この物語では、町の病院に医師や看護師はいて、点滴も薬もあったようですが、ラクの状況に応じた適切な対処や説明、もしくは、それを提供できる人は「利用可能」ではなかったと言えるかもしれません。そして、病院では医師や看護師の責めるような指導をラクは「何も言わずにただ聞いていた」とあり、病院での治療は、心情的にもラクには受け入れられる（Acceptable）ものではなかったようです。

ラクの物語は、遠い国の過去の話であって私たちには無縁のことなのかは、慎重に考える必要があると思っています。